駄菓子屋さんからの報告書

《うろこ雲は乳白色》N-9. 5

望月苑巳

うろこ雲がちらかっています。

春の色を拾って歩くと

駄菓子屋さんの店先に出たので

柔らかい座敷の奥で

猫のように丸まっているお婆さんを買いました

つるんと皮を剥いて

ぺたぺたと芯だけにしても

なお眠り続けているので

金管楽器のように叫んだり

檻褌の歴史に包まれても輝くことはなかったのです。

*

弟よ、あれから幾千の眠りがあり

幾千もの喧騒がありましたね。

しかし、きれいに忘れてしまうのが正しい行為であるというのは誤解に過ぎません

あるいは迷走経路の隠滅につながる

鼠の好きな袋小路かもしれないのです。

だから駅前の寿司屋で、おいしいネタを奪いあったあの夜

二人のあいだから希望が抜け落ちていったのですね。

それからとぼとぼと忍び足で

春の雲のふとんにもぐりこんだのは

あの痩せた駄菓子屋さんだったことを覚えていますか。

でも、あんなお年寄りを丁擲しなくたってよかったのにと
私は反省の黒板を

今でも書いては消し、消しては書いています。

あのお婆さんは

たったひとつのチュウインガムのせいだ

深い眠りの虜になったのですから。

いいえ、皺だらけの骨になったのかもしれないね。

論語読みの論語知らずは、論語にいつか殺される

ということを知っていますか。

弟よ、いずれにせよ

あの日から私の吐息には

黒いリボンが結ばれたままになっています

ころこ雲といっしょに。